

第54回水戸市芸術祭 文学大会「短歌」の部

- 1 一読し当り障りの無い文面転ばぬように老いた初恋
田口 敏
- 2 半てんの裾ほころびぬ夜なべして母が作りしより半世紀
大森 幹雄
- 3 うたを詠む春ののどかに小綬鶏のチャットジーピーチャットジーピテイ
大内 徳子
- 4 コロナ禍の長き年月乗り越えて学びやの子ら夢のふくらむ
三井 弥生
- 5 意気込んで短歌大会出てみるが共感いられずドーンとおちこむ
鈴木 くに子
- 6 余生生きるわれと未来を背負う子のマークを付けし車が並ぶ
宮田 泰子
- 7 熱戦を共に応援したる居間今夏は伯父の座椅子のみあり
幡谷 悦子
- 8 鳴門海峡かいきょうに観光船が入り行けば右に左に大渦おこる
坂場 正具
- 9 「神田川」耳そこに残りてあれば笑みする写真の君も唄えよ
大野 孝
- 10 ねじ花は夢二描くモデルのようにはかなげにらせん階段のぼる
石川 萬里子
- 11 強面の医師のまなこは冴えざえと「手術開始」の声あたたかし
佐久間 秀帆
- 12 五月の空語り尽くせぬありがとう花に囲まれ遙かな旅路へ
石川 紀美子
- 13 胎内に入りゆくこと懐かしき山深き里訪ねしゆけば
鬼澤 京子
- 14 平成七年の調理師免許も遙かにて自由気ままの創作料理す
御代田 澄江

- 15 九十二歳の母はピンクのネイルして嬉し恥かし乙女の笑顔
佐藤 恵美子
- 16 水草に溶け込む金魚や亀の世話病得てより日々励みおり
益子 威男
- 17 道の端の草に紛れしクローバー摘めば五つ葉小さな喜び
深谷 充代
- 18 ブランドの夕張メロンとくらべてもイバラキングの味覚おとらず
佐久間 勲
- 19 駐車場に老鶯の声ひびき来てとなりの庭は既にして森
安蔵 みつよ
- 20 喜寿米寿二人ならんで鷗松亭はらから集う宴はつづく
田島 信子
- 21 鳴きながら空中動く鳶二羽音色の良けれ黒き影惹く
海老澤 貴子
- 22 少しずつ世に隔たるも今年また五キロの梅漬け気合いの入る
梅井 玲子
- 23 夏至の日に燦らいつぶらなえこの実はラインダンスのごとく揺れおり
桐原 勝代
- 24 那珂川の瀬音聴える墓地に佇ち鮎釣る父の小舟を偲ぶ
小森 幸子
- 25 高校の部活で走りし千波湖畔桜並木が想い出誘う
三浦 桂寿
- 26 孫写真毎日アプリで届きたり脳トレになるやウイット返信
灰原 啓子
- 27 ゴーヤには豆腐と玉子でチャンプルー今日は沖縄夕食旅行
天野 仁美
- 28 落ちる梅落ちゆく気分重力にただゆだねてる六月の庭
田上 尚美
- 29 をさな子の折るあじさいの青あはれ隣家いつしか更地になりぬ
戸田 志門

- 30 重ね見る霞がかりの春空にブルーデージーの花の青さを
木村 祥子
- 31 梅雨明けて肌焦がされた照らす日に茹だる暑さに雨恋しい
権田 育夢
- 32 三月の雲はまどかにふくらみて流れゆきたり父のみ魂も
三條 千恵子
- 33 あじさいの藍を深めて夜の雨亡き友の声か韻きのやさし
宇佐美 矢寿子
- 34 嵌め殺しの窓に朝日の反射して布団に丸き夏至の太陽
藤田 真知子
- 35 亡き夫の熊よけ鈴を鳴らしつつ小一孫は筑波に挑戦
高野 フク
- 36 我庭はこの夏畑となりにけり夫と二人で戦時中の如く
小林 暁子
- 37 青あをと牛草のにほひまとひつつ大の字になる梅雨晴れの午後
山本 浩子
- 38 コロッセオの古代の民よ私にも来たこの夏よ叫べる歌える
大吉 政枝
- 39 黄泉からの初音と思うほととぎす厳かに待つ夏は来にけり
小沼 青心
- 40 数学を吾子に教えている娘見てやれるのは中学までと
大森 勝代
- 41 油蝉鳴き始めたる七月の街を誰にも言はない自由
藤 しおり
- 42 あじさいの花日焼けする七月の生徒ら日ごと輝きを増す
廣間 菜月
- 43 華麗なるピアノの響き集いたる笑顔の中に友を見つけり
谷越 正子

(水戸市民会館開館の日)